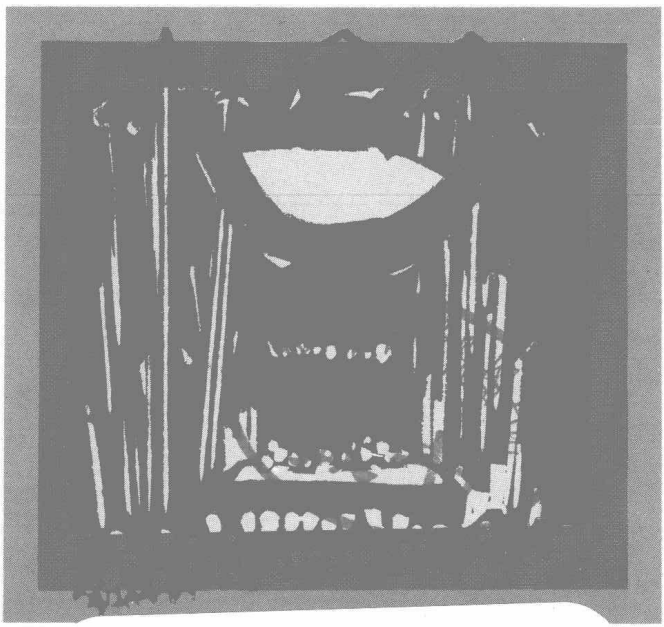
浮標燈

野村尚吾

〔書下ろし長編小説〕

標燈

野村尚吾



浮標燈

一九七四年九月十五日　印刷
一九七四年九月三十日　発行

定価　八九〇円

著者　野村　尚吾
装丁者　関野準一郎
発行者　陶山　巌
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　二六五―六一一一
印刷所　大文堂印刷株式会社
検印廃止
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

©1974　S. Nomura
0093―771069―3041

浮標燈

かからむとかねて知りせば越(こし)の海の荒磯(ありそ)の波も
見せましものを　　大伴家持

――「萬葉集」巻十七――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章

すっかり忘れていたわけではありませんでした。それどころか、意識しないながらも、あの一時期のことは浜村喜久三の奥深い体内のどこかで、ひそかに蠢動(しゅんどう)していたといっていいでしょう。だから高洲美佐子という差出人の手紙を手にした瞬間、ぴんとくる胸騒ぎに似たものを感じたのです。

しかし実態は、やはり手紙を読んで初めてわかってきました。聡子(さとこ)の一人娘である高洲美佐子が、突然なぜ浜村の勤め先へ書信を寄こしたのか、その疑問も読んでいくうちに明白になってきました。

文面を要約すると、だいたい以下のようになりましょうか。

お目にかかったこともないお方に、突然手紙を差し上げるのは失礼かと、さんざん迷いましたが、思い切って最初で、しかも最後になるだろうと思う便りを書く決心になりました。

実は二十年前に亡くなった聡子をご存じと思いますが、私はその忘れ形見の、いわば孤児なのです。その母が死んだときは、まだ私は八歳でした。お聞きになっていたかもしれませんが、私は子供のない伯父夫婦の養女として育てられていましたし、東京に住んでいた母はめったに小倉へは来ませ

んでしたので、ほとんど記憶に残っていません。しかも母のことを、幼いときから「東京の叔母」と言いならわしていましたので、死んだあのひとが生母だったのかと知ったのは、ずっとあとのことで、高等学校へ入学するさい、戸籍謄本を見てわかったのです。そのとき、父はとっくに戦死しており、生まれた私の顔も知らなかった、と聞かされました。

私は東京の大学に入ってから、生母の弟にあたる邦男叔父の家に厄介になっていましたが、卒業して仕事をもちましたので、そこから現在の目黒のアパートに移りました。そのさいにも、叔父は何事も話しませんでしたのに、二年あまりたって、私が婚約したいと相談しましたとき、叔父は初めて、長い間どうしようかと考えあぐねていたのだが、美佐子もいよいよ結婚するというから、お母さんの遺品をそっくり渡すといって、小包のように紐で縛った紙包みを手渡してくれました。その上には「聡子用」と書いてありましたが、もう長い間そのままにしてあったとみえて、煤けていて、字も色褪せていました。

そのとき叔父が、中の物を保存するなり、捨てるなり、好きなようにするがいい、美佐子の判断でするぶんには、誰も文句はないだろう、と申しました。帰ってから開けてみますと、母の日記や母あての書信、それに装身具類もありました。そして初めて私は、若くして逝った母の戦後の混乱期における日常生活の一面を知ったわけです。

私は思いがけない重荷を背負わされた感じで、しばらくはその負担に思い悩みました。だが、考えぬいた挙げ句、少なくとも浜村様から母への手紙だけは、お返ししたほうが穏当ではないかと思うようになりました。そんなわけで、ご都合のよろしい日時を打ち合わせたうえで、お渡ししたいと思い

ますが、如何がなものでしょう？　おはがきなりお電話なり戴けましたら、ご指定の場所へ参ります。何とぞよろしくお指図のほどお願いいたします。

なお私は、この秋に結婚しますが、それまでは只今の住所なり別記の事務所なりへご連絡をお願いします。まことに突然お騒がせいたして相済みませんが、何分ともよろしくお取り計らいくださいますようお願い申し上げます。

手紙を読み終った浜村は、いきなり脳天に一撃をくらったように、軽いめまいに襲われました。たしかに聡子のことは、いままでにも時折り夜更けなど一人でいるとき、思いだすことがありました。だが、何分にも長い時間が過ぎた現在、再びありありと現実に、過去の出来事を見せつけられたようで、その生ま生ましい衝撃に、面くらわざるをえないのでした。

娘の美佐子は多分、浜村がかつて使用した勤務先の封筒を手掛りにして、人事部あたりで現在の部署を確認したにちがいありませんが、よい塩梅（あんばい）に浜村は、その後もずっと勤め先が変わっていませんでした。だが現在は、現役を退いて、嘱託として残っているのです。

脳裏を駆けめぐる雑多な思いが、一応落着くと、浜村は長洲美佐子と会う場所と日時の都合を事務的に決めて、電話しました。ただ初対面なので、目印にハンカチを右手に持っているからと申しました。咄嗟で適当な目印が思いつかなかったので、汗かきの浜村はつい、そんなふうに言ってしまったけれども、なんだか気のきかぬ物を持ちだしたような気がしてなりませんでした。しかもそれだけでなく、ハンカチなどと言ったせいか、妙に気恥しくなって、我ながら大人げないほどおろおろと、上ずった声になってしまうのでした。だが一方、美佐子から返却される手紙によって、いやでも聡子と

の過去の出来事を、もう一度はっきりと思い返させる端緒になったのは間違いありません。

翌々日、勤め先の近くにある約束の喫茶店へ出かけました。浜村はなるべく、遠い昔のこととして、聡子の面影を彼方に押しやるようにしていましたが、やはり娘の美佐子に会うとなると、一種の不安や気まり悪さと、面目ない自責の念などが入りまじって、足の運びもぎごちなく、胸苦しさが感じられてくるのでした。

店に入ると、一人でいる若い娘がすぐ目につき、それが美佐子らしいと気づきました。手紙にあったような紙包みではないが、手紙の束らしいものを入れた袋を、テーブルの上に置いていましたし、それよりも、その面差しがどことなく、亡くなった聡子に似た感じがあったので、つかつかとそのテーブルに近づいて声をかけたのです。考えてみれば、聡子が死んだのは、現在の美佐子とほとんど同じ年齢だったのだから、どこか似た印象を受けるのも当然でしょう。

向かいあって腰掛けた瞬間、美佐子はしばらく浜村を凝視していたけれども、あとはことさらにじろじろ観察しようとはしませんでした。わりに自然に、ぎごちなさもないばかりか、どちらかといえば馴れた調子で、初対面の年配の浜村に、応対していました。それも職業柄当然といえばいえましょうが、浜村にはやはり予想外で、いくらか戸惑い気味な動揺を感じるのでした。どうやら美佐子は、母親と自分をはっきり切り離して、まるで別人格の過去のひとに対する態度で、客観的に聡子のことを話そうとしているように見えました。

浜村はさすがに手紙の現物を眼の前に置かれているだけに、てれ臭く、そのうえ呵責と羞恥の気持もあって、なるべく直接ふれたくなかったので、極力遠くの方へ避けようとしていました。美佐子も

また、初めに「手紙で申し上げましたの、これです」と、紙袋を手渡しただけで、それ以上、彼女の未知の出来事については、何一つ聞きだそうとはしませんでした。したがって二人の間の話は、おのずと美佐子の最近の仕事のことが、主になっていきました。

美佐子は東京のM音楽大学を卒業してから、仲間の数人とコーラス・グループを組織して、ジャズ喫茶やナイトクラブへも出ていたようですが、その後引き抜かれてKプロダクションの所属となって、最近では時たまテレビにも出演するとのことでした。美佐子は、萌木(もえぎ)みちという芸名なのだそうですが、こんど美佐子がリーダー格のギターの葉室と結婚することになったため、一応グループを解散することにしたのだそうです。Kプロダクションとの後援関係は持続しながらも、再編成したグループのイメージ・チェンジをやって、秋には新発足する段どりになっているということです。

「見とおしは大丈夫かね?」

思わず浜村はたずねました。若い人たちはまったく大胆に、思いのままに振舞っている感じがして、心配になったからです。すると美佐子は、笑みを浮かべながら、前よりずっと魅力的なものになりますから大丈夫です、と事もなげに、自信たっぷりな返事をするので、その強気に浜村も、勇気があるな、と感心させられました。

「ところで、小倉のご両親たちはべつに何にもいってませんか?」と訊ねると、

「ええ、離れていますし、干渉めいたことはあまりいいません」ということでした。

「大方、あきれてしまって、諦めているんじゃないかな?」と親しみをこめた冗談をいうと、美佐子も愛嬌のいい微笑を浮かべて、そうかもしれません、と頷くのでした。浜村には、笑ったその口元の

へんが、いかにも聡子を思い出さすものがあって、改めて若い美佐子のつやつやとはち切れそうな顔を見直しました。

「でも、結婚式の前に一度小倉に帰って、それから親たちと一緒に上京して、式を挙げることにしているんです」と、いっていました。まるでそうすることが、親孝行なのだというつもりなのか、あるいは安心させる方法だと考えているかのように聞こえましたが、ちっともこだわらない、さばさばした態度が、浜村にも好感がもてて、身勝手な印象をすこしも受けませんでした。

小倉の美佐子の父親（実際は伯父にあたるわけですが）は復員してから、その地で病院に勤めていたが、その後自分で医院を開業していたことは、以前浜村も聞かされていたのを思い出しましたが、その後も夫婦の間に子供がなく、美佐子を引きとって可愛がって育ててきたようです。それだけに、手元から派手に飛び立たれる感じがして、あとに残る夫婦は、さぞ寂しい気持だろうと想像されるにつれ、浜村もつい、小倉の親のことをあれこれと話題にする羽目になったのです。

「それでは、これからはテレビを気をつけて見ることにするけれども、とりあえず秋の結婚式までに、お祝の品をうんとはずんで届けさすとしましょう」と、よけいなことまで口走りながら、浜村は気をよくして腰を上げました。浜村はテーブルの上の袋を取りあげたが、結局、手紙についてはどちらからも、一言もふれずじまいだったな、と胸をなで下ろす思いがしました。

外へ出て、美佐子と並ぶと、思ったより背丈があり、聡子よりずっと高いのに気づきました。

「亡くなったお母さんより、大分背が高くなりましたね」と、うっかり聡子のことを持ちだして、途端によけいなことを言ったな、と後悔しました。だが、美佐子はあっさり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そりゃ戦前の人とはちがいますわ」
と、当然だといわぬばかりに、さりげなくかわしました。そのように弾かれてみれば、まったくそのとおりで、聡子が死んだときはまだ美佐子は幼かったし、比較のしようのないことを持ちだすなんて、なんとも馬鹿げた話だし、いつまでこだわっているのか、と窘められている気がしないでもありません。だが現在、浜村の腕にかかえた袋の内には、かつてのなまぐさい事実が、書き認められており、それを持っていることが無意識のうちに、浜村をその方に向けさせずにはおかなかったのです。
それでいて、眼前の成熟しきった生ま身の美佐子を仲だちにしては、刺激が強すぎて、しっくりと思い出につながらないし、むしろ娘ざかりの生ま生ましい肉体に圧倒されそうな感じがしました。浜村には、夏の強い日射しの下で見る美佐子は、眩しすぎるようです。
喫茶店からすこしばかり来た街角で、浜村は美佐子と別れました。浜村は遠ざかる後ろ姿を、ちらっと振り返ってから、それが癖の項垂れた格好で、紙袋を抱えながら、勤め先の新聞社の方へ戻りました。
しかし、浜村はその紙袋の始末には、じっさい困ってしまいました。勝手にしろと戻されたとはいえ、折角届けてくれたものを無下に紙屑籠に捨て去る気にはならず、またいくらかは、拾い読みしてみたい誘惑もありました。それでいて直接手に取って読むのは、恐い感じがしたし、触れたくない嫌悪感もあったからです。
そのうえ、自宅へ持って帰るのは、なんといっても憚られます。いまさら過去の事件を蒸し返して、波瀾を起こしたくはありません。それより、めったに誰にも、見せられる代物ではないからで

す。美佐子に見られたことさえ、浜村には耐えがたく、羞恥で顔を覆いたいくらいなのです。そればかりでなく、過去の癒されない秘密の傷口を、掌の中に握り込まれたも同様の負い目を、美佐子に感じねばならぬのが、はるかに辛いといえるかもしれません。だが美佐子は、実際は見て見ぬふりをして、素知らぬ体で返却してよこしたけれど、それは双方に共通する秘密を持った結果になり、同様に内証事を知らばっくれて行なったことになったのは確かなようです。

浜村は思案のつかぬまま、その紙袋を自分専用のロッカーに蔵いこんで、手をつけずにいました。ところがそれから数日後、幸いにも娘夫婦が孫を連れて、海に近い聟の生家で休暇を過ごすことになり、不在中なにぶんにも不用心だからと、老妻が泊りがけで留守番に行くことになりました。浜村は妻のいない家で気楽に寝起きできる、まことによい機会に巡りあえたとばかりに、その紙袋を家に持ち帰って、ひと晩がかりで、その手紙の束の主なものを読むことになったわけです。

もちろん聡子との交際のあらましは、今でも記憶にとどめており、ときには思い起こすことがあるくらいだから、消え去っていたわけではありません。だが、当時の現物である手紙を、自分の手にして読み返すとなると、その生臭さや気恥かしさは、予想以上でした。浜村は興奮状態のまま、しまいにはウイスキーの瓶を持ちだして、夜更けにおよぶまで、細部にわたって甦る、その記憶の間を往きつ戻りつしました。そして、いきいきと想起される事件とともに、戦後の混乱期の一時期に生きる思いがしてき、いったいあれは何だったのか、ともう一度、事件とその背景について深く反省を強いられるだけに、浜村なりに追及してみようという気になってきたのです。

一　章

一

高洲聡子――それは結婚前の名前で、そのころは戸籍上では、岸中聡子となっており、また実際にもそう名乗っていた。

聡子と初めて会った日のことは、いまでもよく浜村喜久三の記憶に残っている。それは偶然にも「三鷹事件」の起きた、昭和二十四年七月十五日の騒がしい夜だったからだ。

その晩は、浜村の加入していた「ジャーナリスト研究会」の定例の会合が、中央線のH駅前のレストランであり、会は八時半すぎに終った。だが会のあと、出席者の大半は席を立たずに雑談がつづいていた。すると友人の戸倉博が近づいてきて、「出ようよ」と促したので、その夜初めて出席した江口宗之と一緒に、会場を離れた。江口宗之も学友だが、半月前にソ連から引揚げてきたばかりなので、浜村がおのずと案内役をつとめる格好になっていた。

数日前、江口宗之が六年ぶりに無事復員したと、浜村の勤務先の新聞社へだしぬけに現われたさ

い、学友たちの消息に話が及んだが、それなら近くこんな会合があって戸倉も出席するはずだから、出てみないかと江口を誘った。浜村としてはそれだけでなく、そうした会の雰囲気に触れれば、戦後の日本の急転した現状の理解にもいくらか役立つだろうし、戦中戦後のブランクを取り戻すのに好都合ではないかという配慮があったからで、戸倉には前もって電話で、江口が引揚げて来て、会合にも出るからと打ち合わせておいたのである。

もともとこの研究会にも、規約は一応できていて、新聞や雑誌の記者で二名の会員の紹介があれば、入会が認められることになっており、新聞社で傍系の出版関係の仕事をやっている浜村も、一年ほど前にK出版社に勤務する戸倉に勧められたのだが、母胎が雑誌社関係のせいか、どうしても雑誌記者が多いのである。だいたい会の主旨は、占領下の複雑な時局問題や戦後経済についての討議を行なったり、時には講師を招いて講演会を催したりもするが、また会員相互に連絡をとり、情報交換もしあうのが建前になっていた。

しかし、明確な主義主張を打ち出すようなこともなく、戦後としてはやや微温的で、研究会とか連盟とかいわれる団体がさかんな風潮の中で組織された、賑やかだが行動力の弱い研究会にすぎなかった。

復員してまもない江口は、まだ無職で資格はなかったが、浜村と戸倉の二人の友人に連れられて、ただ傍聴に来た形式になっていたけれども、もともと目的がそれだけでなかったので、会が終了すると、すぐにも他の方へ行動を移す仕儀になったのである。

三人は新宿へ出て、バラック建ての狭い飲み屋の並んでいる横丁の一軒に腰を下ろした。久しぶり

に顔を合わせただけに、いきおい話もはずんだ。だが江口宗之は、しきりに旧友の動静を知りたがるのに対し、戸倉博は江口のシベリヤ抑留中の実状を聞きだしたがった。

ところが江口は、意外にも控え目で、抑留生活の話に熱が入らず、むしろ話したくないように見えた。警戒心が脱けきらぬためか、あるいはいくら話しても、内地にいた連中には、とても実情は理解できぬものと思い込んでいるのか、すこしも期待にこたえるような話をしてくれないのだった。それに、焼け跡に急造されたちゃちな店なので、客が出入りするたびに腰を上げて通してやらねばならぬし、店も立て込んで騒がしく、そんな空気に馴れぬ江口は、落着かぬこともあったらしい。だが、飲み屋といえば、その程度のみすぼらしいのが殆どで、部屋に上がってゆっくり飲む店などは、浜村たちにはとても無理な相談というほかないのだが、それが引揚者の江口には、納得いかぬところでもあった。

戸倉は江口の報告が期待はずれだったため、あきらかに不満気な様子で、そのうえ酒をあまり飲まぬので、興醒めの素振りが見えており、十時をまわると、「そろそろ帰ろう」と気早く腰を浮かしはじめた。一方の江口は、何年ぶりかの懐かしい新宿の盛り場に来ただけに、未練があるらしく、それにまだ飲み足りなくもあるようだった。といっても、酒を飲ます店はごく少なく限られているし、まして知らぬ所をほっつき歩くのは物騒でもあったので、浜村も戸倉のいうなりに店を出ることにした。そんな事情を十分に知らぬ江口には、たしかに不満に思えるにちがいなかった。

新宿駅前の明るい広場まで来ると、じっとり汗ばんだ皮膚に、夜風が涼しく、酔いもひいていく感じがした。そのとき、駅の構内から出て来た二人連れの女性に、思いがけなく声をかけられた。

「浜村さーん、中央線が故障で、フォームはごったがえしているわよ」
呼びとめたのは、先刻までジャーナリスト研究会に出席していた阿蘇光恵である。会のあとは、いつも気のあった連中が何人かで、思い思いに二次会をやるのが慣習になっているので、彼女たちもどこかの喫茶店で話しこんでいたのであろう。
阿蘇光恵の報告によると、三鷹駅で脱線事故があり、今夜中には復旧の見通しが立たぬので、折り返し運転が行なわれるとのことであった。
「ちえッ、また事故か！」
戸倉博はうんざりした口調で、投げだすように舌打ちしたが、周囲の者も同感の面持ちで顔を見合わせていた。それは、敗戦後の交通機関の老朽化による事故の慢性症状に対する憤懣もあったが、そのうえ最近では、「悪質な列車妨害事故が頻発」と、新聞にたびたび報じられていることにも原因があった。
つい十日ほど前には、国鉄総裁の怪死事件が発生して、真相はいまだに不明だった。その轢死事件は、国鉄職員の九万人をこす大量解雇の発表に対する反対闘争に関連があるように、誰もが考えがちであったし、その深刻な紛糾には、一様に重苦しいものを感じていたからである。
その夜の三鷹駅脱線事故で、直接被害を受けたのが江口宗之と、もう一人は阿蘇光恵のつれの女性であった。江口は武蔵小金井駅であり、阿蘇のつれも国分寺駅とかいっている。それで阿蘇光恵は、その女友達を自分の部屋に泊めることにしたが、副食物が心細いので、これから知りあいの店に頼んで分けてもらいに行くところだという。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com